理研会報

発行　印刷　理研研究部
事務局　成田市幸町948.1　成田小学校内

昭和六十一年度を迎えて

〈理科研究部長〉
酒々井小　川勝　丸重

昭和六十一年度を迎え、早三か月がすぎました。先生方には、児童・生徒の新学期活動にお忙しい日々をおすごしのことと存じます。

過日の研究部総会には、多数の方のご参加をいただきまして、活動計画、予算等ご審議いただき、まことにありがとうございました。承認いただきました活動計画を実践に移すべく、本年度も活動してまいりたいと思います。

さて、理科研究部は、終戦直後理科同好会として発足したと聞いております。

物のない時代、児童・生徒により理科教育を進めるため、自作教具を作ったり、又、材料を買い出しのため、リュックサックを背負い、買い出しにいくなど、大変なご苦労をなさったようです。理科が好きで好きでたまらないという集団であったと伺っています。

先輩諸氏の大変なご努力により現在の理科研究部に育てあげられてまいりました。現在、会員数は、三百五十二名（低学年部会八十八名、高学年部会百三十五名、中学校部会百三十三名）という、印旛研の中で、第四番目の人数をようしています。

しかし、毎年、同好会の頃からご苦労いただきました、先輩の先生方が、一人、また、一人と、ご勇退されていくことは、私共にとって非常にたくさんに思いをしているところであります。

今年も、佐倉市立臼井小学校の校長先生をなさっておられた、飛田育男先生が、職場をえらびました。

先生も、理科研究部創設からの会で、研究部幹事、副部長として、理科研究部発展のためつくされました。今まで、理科研究部に対しての、ご指導、ご援助に対し感謝申し上げる次第です。

私共は、先輩諸氏の残されました、この伝統ある理科研究部を益々発展させていかなければならないと存じます。

先日のニュースで、三学校三年生における理科・社会科のとりかたについての問題が討議されておりました。

低学年における、理科教育のあり方について見直しをしてまいらねばいけないようです。

私どもは、現場での新学習指導という立場から、とりくんでいる問題を真剣に考えていかなければならないと存じます。

会員の皆様のご協力をお願いいたしまして、ごあいさつといたします。

昭和六十一年度　事業計画

- 十月一日～三日　・新理科作品展（印西中）
- 十月十四日　・新研修会　・理科教育展示会（成田小）
- 五月十日　・役員会（成田小）
- 五月十三日　・研究部総会（成田小）
- 六月三十日　・研究員集会（酒々井小）
- 九月三十六日　・研究員集会（酒々井小）

※理研会報の発行
※部会理科教育講座（夏休み中）
※研究会初日の成功（印西小）

理科研究部　役員一覧（昭和六十一年度）

- 部長　川勝　丸重（酒々井小）
- 副部長　今井　利彦（印・西中）
- 副部長　石井　堅（佐・東小）
- 部会部長
  - 一部会　徳田　進（佐倉小）
  - 二部会　山下次吉（根古石小）
  - 三部会　河切久男（白井中）
  - 四部会　斉藤政勝（八街中）
  - 五部会　荒木昭夫（印・南小）
- 理事
  - 竹井貞雄（佐倉中）
  - 今井正臣（臼井小）
  - 福田　健（間野台小）
  - 因幡鉄夫（上志津中）
  - 竹内勇雄（高崎中）
  - 手塚重夫（成田中）
  - 古谷　弘（印西小）
  - 源渕　栄（富里小）
  - 伊藤定夫（富里小）
  - 佐藤孝雄（成田小）
  - 中村武夫（西　中）
  - 外山栄一（成田中）
  - 穴吳鉦治（白井二小）
  - 新司福男（中学三小）
  - 寺内義雄（内野小）
  - 川崎栄二（八街東小）
  - 佐藤光太（公津小）
  - 京相光徳（二州小）
  - 安井貞蔵（印和小）
- 幹事
  - 木川　吾（玉造小）
  - 小山　治（成田小）

※渡邊博孝先生（県義務教育課）
平山正二先生（佐倉市教委）
竹野　隆先生（印西町教委）

理科指導雑感

酒々井小　徳田　進

このごろ、授業におけるやりかたが集団でスムーズすることがよく見られるようになったことは、理科だけでなく、他教科でも同じであろう。理科に関する知識・理解が低下しているように感じている。

テストをすれば、すばらしい点数を取るが、それは、限られた範囲の中、それも学習した所だけである。ノートを取らせても、板書をどんどん書かせるなどして、た事もたまらないなったっている。

この現象をよく知ったうえで授業をしなければ大変である。指導者である教師の語彙かえることが一つ。もう一つは口をあけたら食わせてやるような教育を必要であると考える今日この頃である。

理科指導雑感

西中　中村武雄

理科の授業を通してみられる生徒の変化、それも十年ぐらい前の生徒たちと比較してみると、次のような事がなりたつのではないだろうか。

1. 言葉の意味を知らない。
2. 当然、経験していると思われることが未経験である。
3. ノートをとる力がない。
4. 植物や動物を知らない。

「ホニュウ類を書きなさい。」という問いに対してすべて書きだせる生徒は何人もいない。書けたとしても、イヌ・ネコ・ウシ・ウマ・ヒツジ・ヤギ・ブタ・ネズミ・ウサギ・ヒトなどである。なかには、クジラやイルカを書く生徒も多くみられる。「母乳」で育つ動物であることを説明しても安心していられない。「ホニュウ」って何ですかと質問がくる。一瞬、目を疑うが感ぜられずにはいられない。「母乳とは」「母乳で育つとは」何であるかを説明する必要があるのである。

昭和六十一年度もスタートしてはやニカ月。会員の先生方も忙しい日々をおすごしのことと思います。

ところで、理研会報の年度第一号ができました。今年も皆様の大切な原稿になるようお願いいたします。